

研究現場から

医療と日常の混交として 「在宅療養の文化」を探求する、新しい社会学

櫻田 美雄（社会福祉学分野 准教授）

「在宅療養の文化」は、医療と生活が総合されてできあがりつつある、日本の新しい文化である。人口密度の高い日本では、訪問診療・訪問看護を効率的に行うことができるので、この文化は、介護保険後の日本に特徴的な文化として顕現しつつある。たとえば、在宅療養の現場では、以下のようなことが起きているのではないだろうか。第一に、医療者やヘルパーの振る舞いが家庭内での話題になる。第二に、療養者と家族の日常や非日常の在り方が、専門職訪問者（医師・看護師等々）の医療的関心事になる。つまり、「医療と日常生活の相互規定的混交」が、起きてきているのではないだろうか。

この起きていることの全体を「在宅療養の文化のハイブリッド（異種混交）性についての研究」として把握していきたい。つまり、在宅で起きていることを、医療的なものと日常生活的なものの両方が、複雑に混交してお互いを変化させつつあるものとして考え、それを探求していきたい。

例えば私は、現在、あるALS（筋萎縮性側索硬化症）の患者さん宅に、3年越しでフィールドワークに入っているが、そこでは、患者さんと家族の話題の中心的部分のひとつが、訪問してくる専門職たちの吸引技術であった。すなわち、ALS患者は、呼吸筋が衰えるため、ある程度病状が進行すると一日に数十回の痰の吸

引が必要となるが、その一見医療的処置にのみ見える作業が、単に生きるための生物医学的作業としてのみ扱われるのではなく、「片手でぞんざいだが、うまい」とか「両手で丁寧で基本通りだが、それほどうまくはない」とか、さらには「吸引の準備段階での体位の変換の手際がよく、かつ、観察力も優れていて、気管支のなかのどの部分に痰があるのかの見極めが適確で総合的に優れている。しかも、無理をしないうところがいい」というような形で、ほとんど文化的に批評する対象ともなっていたのである。また、ぎゃくに、医療者側が患者の日常から強く影響されることもあった。たとえば、患者の暮らしを支援する中で、旅行の重要性が見えてきたため、在宅療養クリニックの将来計画に、旅行代理店の機能を組み込むことが検討課題となっていく、というようなことが起きてきているのである。つまりは、療養者の日常生活と医療が相互的に入れ子になって、影響を与えあっているのである。この状況は、医療的状况というより、社会的状況である。この新しい状況を探求する新しい社会学を作っていきたいと願っている。



ALS患者の吸引場面

大学の1年間

行事 *****

2013年 4月8日	入学式
4月10日	定期健康診断
7月18日	大学院特別講義「尺度開発の実際 開発プロセスと尺度に求められる要件」
8月3日～4日	オープンキャンパス
8月29日	大学院博士前期・後期課程入学試験（9月4日合格発表）
9月6日	編入学試験（9月18日合格発表）
9月26日	助産学専攻科特別講演会「昭和の助産・これからの助産～真実に寄り添う～」
10月12日	助産学専攻科入学試験（10月24日合格発表）
11月2日	あざみ祭
11月4日	第15回国際フォーラム「臨床看護におけるシミュレーション」
11月16日	推薦入学試験（11月28日合格発表）
11月23日	看護専門職公開講座「ひろがる災害看護」
12月2日	大学院特別講演会「Ethnography: An Excellent Research Method for Nursing」
12月19日	特別講演会「認知症高齢者とその家族の人権を守る」
2014年 1月18日～19日	大学入試センター試験
2月25日	一般選抜入学試験前期日程（3月6日合格発表）
3月1日	大学院オープンキャンパス
3月12日	一般選抜入学試験後期日程（3月20日合格発表）
3月14日	卒業式